

自己の障害理解を深めるための防災教育 ～災害発生時のイメージを明確化する活動～

田中 豊大・芳之内 修・岡本 三郎・久川 浩太郎

聴覚に障害のある生徒にとって、避難時や避難所での生活場面において必要な情報を得たり、支援を求めたりすることの必要性は高い。そこで、筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部普通科では、災害を「自分ごと」として捉えるための様々な体験型の学習を実施し、生徒の防災意識を高めながら、自らの障害について理解を深める取り組みを行ってきた。実践を通して、生徒が「自助・共助・公助」の考え方にに基づき、他者と協力するために必要なコミュニケーション能力や適応力の重要性を自覚したり、障害の有無に関わらず自らが他者に貢献できることを考えたりする姿が見られた。

キー・ワード：防災教育 自立活動 総合的な探究の時間 障害認識 自助・共助・公助

1 はじめに

文部科学省地震調査研究推進本部によれば、首都直下地震で想定されるマグニチュード7程度の地震の30年以内の発生確率は、70%程度（2020年1月時点）とされている。災害が発生した時には、身を守るために適切な避難行動をとる必要がある。また、場合によっては避難所での一時的な生活が必要となることもある。こうした状況の中では、正しい情報を入手することやコミュニケーションを通して他者と協働することが重要となるが、いずれの場合も音声を伴うことが多く、聴覚障害者にとって様々な場面で困難が生じやすいことが予測される。そのため、自分自身の障害についての理解を深めながら、災害発生時の対応をシミュレーションし、必要な支援や他者と協力する方法などを考えることは、聴覚障害者にとって重要だと考えられる。そこで、本稿では、聴覚に障害のある生徒を対象に行った防災学習の実践事例を報告する。

2 実践目的

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、「本校」）高等部普通科では、自立活動の時間などを中心として、生徒の防災に対する意識を高めるための様々な体験的活動を継続的に行っている。それらの実践や振り返りの活動から見られた生徒の反応や意識の変化から指導の効果を分析する。

3 実践方法

(1) 対象と指導の過程

令和3年度入学の本校高等部普通科生徒24名を対象として、学年全体での指導の時間にあたる「自立活動の時間」、「総合的な探究の時間」、「ホームルーム活動」に実践を行った。2年次2学期に指導を開始し、3年次2学期の文化祭展示を指導のまとめとした。指導の計画は以下のとおりである（Table 1）。

Table 1 指導計画

第1次	講話・グループワーク ・東日本大震災の被害状況について ・聴覚障害者の避難状況について ・話し合い（振り返りシート①）
	講話・グループワーク ・「自助・共助・公助」について ・話し合い（振り返りシート②）
第2次	避難所体験・非常食体験 探究学習 ・防災について各自でテーマを設定し探究
	校外学習（振り返りシート③） ・市川市内フィールドワーク ・防災体験ツアー（防災館見学） グループディスカッション
	中間まとめ（振り返りシート④）
第3次	防災講話 ・岩手県出身の教員による講話
	現地学習（振り返りシート⑤） ・修学旅行（岩手県・宮城県）
第4次	文化祭展示発表 ・「私たちにできること」

(2) 方法

指導の過程で行う振り返りの時間に生徒が記入する「振り返りシート」への記述内容を基にして、実践に対する効果を検証した。

4 実践

(1) 第1次

導入では、災害に関する基礎的な知識について教師が講話を行った。東日本大震災を例に取り上げ、被災地の写真を見せながら震災の規模や被害を指導した。その後、被災した聴覚障害者の状況を映像などで生徒に提示し、気付いたことを生徒同士で話し合う活動を行った。また、災害の被害を少なくするための対応について「自助・共助・公助」の考え方を示し、それぞれの重要性を考える機会を設けた。

(2) 第2次

被災時のイメージを明確にするため、避難所生活を想定した体育館での体験学習を実施した。簡易トイレを組み立てたり、非常用モバイルバッテリーを使用してバルーンライトを稼働させたりする活動を行った。また、断水などにより入浴できなくなることを想定し、水を使わずに使用できるシャンプーを用いた洗髪体験をした。

非常食体験では、水を入れて作るアルファ米のカレーライスを試食した。味を好む生徒も多くいたが、一方で、「量が少ない」、「思っていたよりも辛い」などと感想を述べる生徒も見られた。

さらに校外学習では、本校が位置する市川市のハザードマップに従い、学校周辺の危険箇所を確認するフィールドワークを行ったり、消防庁が運営する防災館での防災体験ツアーに参加したりするなどの活動を行った (Fig. 1)。

第2次の最後には、学習を通して感じたことを話し合うためのグループディスカッションを行った。話し合いでは、「補聴機器やスマートフォンの電源を確保できなくなることを想定すると、替えの電池やバッテリーを携行したり、筆談を求めたりする必要がある」という意見が複数挙げられた。また、「避難所での最新の情報が、掲示板のような形で文字化されれば、聴覚障害者だけではな

く、その場にはいない聴者や耳が聞こえにくい高齢者にとっても情報を得る手段になるのではないか」、「聴覚障害の有無に関わらず、体力のある若者として自分にもできる力仕事などには積極的に協力したい」といった避難所の運営に関する具体的な意見も挙げられた。



Fig. 1 本所防災館での防災体験ツアー

(3) 第3次

3年次になり、事前に計画していた東北方面への修学旅行に向けた学習が具体性を増す時期となった。この時期に、岩手県出身の教員を講師として、防災講話を行った。当時の様子や被害の状況について、講師自らが撮影した写真を提示しながら、話を進めた。生徒は、震災前と震災後を同じ場所から撮影した写真を見比べ、被害の大きさについてイメージが明確化する機会となった。

2023年6月7日(水)から6月10日(土)にかけ、東北方面への修学旅行を実施した。1日目の夜には、本校の元教員であり、実家が被災した宮城県石巻北高等学校教諭の大村周平氏から防災講話を受けた (Fig. 2)。震災によって経済状況が大きく変化した家庭もあり、震災から10年以上が経過しても、見えない場所で被害は続いているという話に、生徒たちが熱心に聞き入る様子が見られた。また、陸前高田市の震災遺構の見学をしたり、三陸鉄道の震災学習列車(鶴住居駅・宮古駅間)に乗車し被災地を車窓から見ながら被災当事者の話を聞いたりする活動などを行った。これらを通して、学習で積み重ねた防災の知識を深めた。



Fig. 2 修学旅行での防災講話

(4) 第4次

修学旅行が終了した後、令和5年度文化祭（第46回櫓祭）で学年が担当する展示発表の内容を学年で話し合った結果、防災をテーマにした謎解き型の迷路を制作することに決まった。地震を題材にしたアニメ映画のストーリーや登場人物になぞらえ、自分たちが現時点で災害に対して対策できることをクイズにし、老若男女を問わず防災について楽しみながら学べる展示発表を行った。

5 振り返りシートの分析

(1) 方法

指導の過程で、生徒を対象に振り返りシートを記入させ、防災に対する意識や学習を通して感じたこと、学んだことなどについてまとめる活動を5回行った。「振り返りシート1」、「振り返りシート2」、「振り返りシート3」、「振り返りシート5」は紙のワークシート、「振り返りシート4」はMicrosoft Formsの電子アンケートで行った。記述を基に分析を行うことにした。

(2) 回収率

回収率は以下のとおりだった（Table 2）。

Table 2 振り返りシートの回収率

振り返りシート1	20名 (83%)
振り返りシート2	21名 (88%)
振り返りシート3	20名 (83%)
振り返りシート4	22名 (92%)
振り返りシート5	22名 (92%)

本稿では、第2次の中間まとめの際に実施した「振り返りシート4」と、修学旅行において現地での学習が完了した際に実施した「振り返りシート5」の記述内容を中心に報告する。

(3) 「振り返りシート4」の結果と分析

① 学習前後の防災意識の変化を問う質問

「聴覚障害者として防災について学習する前と現在の自分を比べ、防災に関する意識・考え方は変わったか」という問いに対し、「変わった」が11名、「少し変わった」が8名、「ほとんど変わらなかった」が3名、「変わらなかった」、「わからない」がそれぞれ0名であった。24名のうち19名（79%）が「変わった」、「少し変わった」と回答した。

この結果から、多くの生徒が、防災学習を通して、防災への意識や考え方について何らかの変化を感じていることが示された。「ほとんど変わらなかった」と回答した生徒の記述には、「意識は変化したかもしれないが、具体的な言葉では説明できない」、「災害発生時に生じる困難や必要な支援について自分が想定していたこと以外の発見がなかった」という内容が見られた。

② ①の理由を問う質問

次に、学習前後の防災への意識や考え方の変化について、回答した理由を自由記述によって尋ねた。また、記述された内容は、次のA～Fの6項目に分類した。なお、分類の作業は、本校の教員2名で行った結果、90%以上の一致率が得られた。回答数は21件で、回答者22名のうち1名が無回答であった。結果を以下に示す（Table 3）。

Table 3 記述内容の分布

A	補聴機器に関すること	0件
B	情報保障やコミュニケーションに関すること	4件
C	自分の障害の説明や必要な支援・配慮に関すること	7件
D	周囲の人々とのかかわりや助け合いに関すること	5件
E	身体障害者に対する理解に関すること	1件
F	その他（聴覚障害に関すること以外、感想など）	4件

記述内容を具体的にみると、B「情報保障やコミュニケーションに関すること」の記述には、「コミュニケーションツールを確保することが大事」、「災害が起こると情報格差が起きてしまう」といった内容があった。

C「自分の障害の説明や必要な支援・配慮に関すること」には、「今までは聴者と同じ対処法を考えていたが、防災学習を通して、聾者だからどうするか?という考えが生まれた」、「今までは家族がいるから安心だろうとあまり考えなかったが、もし一人暮らしで自分しかいない時に災害が発生したらどのようにすればよいかを考えるようになった」、「できないことはできるように工夫が必要」、「事後対応ではなく事前対策をしておく」、「自分の障害認識をより深めていくことが肝心だとわかった」という記述が見られた。

D「周囲の人々とのかかわりや助け合いに関すること（避難所、日々の暮らし）」の記述には、「大学生になり寮やアパートで暮らすことになった場合には、隣人に助けてもらえるような関係性を築くことが大切だと思う」と、卒業後の生活に結び付けて考えたと思われる記述があった。

E「聴覚障害者を含む様々な障害者等に対する理解に関すること」には、「実際の避難所生活での聴覚障害者の様子を知ったことで変化があった」という内容の記述があった。

F「その他（聴覚障害に関すること以外、感想等）」の記述には、「震災が起きた時のイメージがあまりできていなかったが、今回の学習を通して、すべきことが分かってきた」、「台風で避難所に避難した経験があるためちょっと分かっているつもりでいる」といったものが挙げられた。

③ 必要だと思う支援について問う質問

「聴覚障害者として、災害発生時に必要な支援は何だと思いますか。そのためにどのような工夫をしますか」という問いに対して記述を求めた。記述した内容を、「筆談に関するものについて」、「情報保障について」、「補聴機器関係について」、「停電時を想定したものについて」、「人とのかかわりについて」、「その他」の項目で整理した。結果は以下のとおりである (Table 4、Fig. 3)。

Table 4 記述内容の分布

必要な支援	件数
筆談に関するものについて	13
情報保障について	9
補聴機器関係について	8
停電時を想定したものについて	4
人とのかかわりについて	4
その他	8

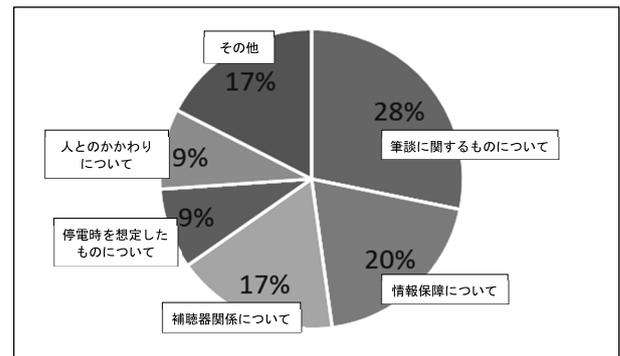


Fig. 3 記述内容の割合

それぞれの項目について、具体的に挙げられた内容を以下に列挙する。

〈筆談に関するものについて〉

紙、メモ帳、ペン、筆談用具、筆談ボード等

〈情報保障について〉

情報、情報の伝達、情報の見える化等

〈補聴機器関係について〉

補聴器・人工内耳の電池・代替機

〈停電時を想定したものについて〉

バッテリー（充電）、スマホ、電気

〈人とのかかわりについて〉

近所付き合い、近所の人への配慮、連絡先交換

〈その他〉

笛、障害があると見て分かるようなバッジ、聴覚に障害があることを書いた板を首からぶら下げる、聴覚障害者であるバンダナ、コミュニケーション等

以上の結果から、必要な支援として記載されたものは「筆談に関するものについて」が多く、次いで「情報保障について」、「補聴機器関係について」、「停電時を想定したものについて」、「人とのかかわりについて」であった。

「筆談に関するものについて」、「情報保障について」、「補聴機器関係について」は、情報入手（視覚情報、聴覚情報）やコミュニケーションに関係することから、多くの生徒が災害時の情報入手やコミュニケーションに不安があるものと推察される。また、災害時の補聴機器の電池、バッテリー不足を懸念している生徒もおり、補聴器や人工内耳などの補聴機器が使えなくなることによる情報入手の困難さや、音声情報が得られない状況を懸念していることも推察される。さらに、日常的にスマートフォンを情報手段として活用しているため、停電等で電気が使えなくなる状況下での心配も予想される。

情報入手のための情報保障には手話通訳も含まれているが、今回、必要な支援に挙げられなかった。その理由として、生徒が手話通訳を受ける上での、手話通訳派遣依頼の経験の不足が考えられ、現段階では、筆談や補聴機器を活用してコミュニケーションをとったり、スマートフォンから情報を入手したりすることが主流になっていることがうかがえる。

(4) 「振り返りシート5」の結果と分析

修学旅行が終了した後に、振り返りシートで「昨年から震災学習を続けていたが、学習する前と後で防災に対する意識についてどんな変化があったか」という問いに対して記述を求めた。生徒によって記述された内容を以下に抜粋する。

Table 5 記述内容の抜粋

・私が5歳の時に東日本大震災を体験した。あまりはっきりと覚えていないが、突然地面が揺れてテレビや棚の上の物が落ちて、言葉では言い尽くせないような怖さを感じたのは今でも覚えている。年齢が上がるにつれて、災害のことを忘れつつある時に、修学旅行を通して意義のある防災学習ができた。様々な方からの体験談やメッセージを胸に刻んで、小さなことから行動を始めたい。例えば、ハザードマップを見て、避難経路を確認することや、非常食といった備えを準備したい。

- ・私が住んでいるのは、〇〇なので海に面していないが、川が近くにある。洪水を想定しながら生活したいと思った。
- ・自分の身は自分で守る、津波てんでんこの考え方を大切にして、正しく災害を知り、正しく恐れながら過ごしたい。
- ・修学旅行で震災遺構を多く訪れた中で、津波から逃れるために中学生が小学生を背負って逃げた話や、海岸からかなり離れていたにも拘わらず5階まで浸水した建物が特に印象に残っている。これで大丈夫と安心せず避難し、「自分が助からないと、助けられる命も助けられない」ということを頭に入れて過ごしたいと思った。
- ・修学旅行に行く前に〇〇先生の講演を聞いたおかげで、実際に現地を訪れて聞くバスガイドさんの話や震災学習列車での体験談がより分かりやすかった。
- ・東日本大震災の時の津波の高さがオレンジの線で示されていたり、標識が至る所に立てられていたり、避難訓練が3か月に1回必ず行われていたりと防災意識の高さが自分たちと比べものにならないと思った。忘れさせない努力がすごかった。
- ・被災者の話を何人かから聞いて、災害はいつ起こるか本当に分からず、油断してはならないことがよく分かった。学習を通して、災害に必要な備えについて知ることができた。家には、どれくらいの保存食や避難グッズがあるか、親と確認した。
- ・昨年は防災について調べたり、被災者の体験を聞いたりしたが、修学旅行で岩手に行き、震災の恐ろしさを実感した。
- ・以前の学習で視聴した発災時の映像と同じ場所を生で見、改めて震災の恐ろしさを実感した。
- ・被災者の話で一番意識が変わった。本当にいつ身近な人を亡くすか分からないのだと思った。
- ・聴覚障害者として災害時にどんな行動をとればよいか意識したことがなかった。一人暮ら

しだったら…と将来のことを考えるきっかけになった。

- ・〇〇先生の講話を聞いて、いつか災害ボランティアとして支援したいと思った。
- ・避難所体験の授業の一つに非常食を食べる体験があったが、自分が苦手な食べられない物だった。事前に食べられる物を日常的に準備しておかなければと思った。

※下線部は類似する記述が複数人から見られたことを示している（筆者加筆）。

実際に現地に行くことで、理解が深まったり、実感できたりした、という記述が最も多く見られた。また、意識の変化に留まらず、備蓄品の確認を行ったり、保護者と家庭内で話題にしたりすることで、学習した内容を実生活に役立てている旨の記述も見られた。さらに、聴覚障害者として災害発生時をイメージするきっかけになったと書いている生徒もいた。これらのことから、それぞれの生徒が一連の防災学習を通して、何らかの意識の変化があったことが示された。

6 おわりに

振り返りシートの記述などから、生徒が「自助・共助・公助」の考え方にに基づき、当事者としての自覚を持ちながら防災への意識を高められたことが示唆された。自らの命を守るために、聴覚障害者として自分に必要な支援や情報を求めることは重要な自助となる。しかし、それだけでなく共助・公助のように、周囲の人に対して、または周囲の人と共に何ができるか、と考えることは、障害の有無に関わらず、社会に生きる一員として大切な視点だと思われる。しかし、そのためには、自分の障害の理解を深め、自分でできること、支援を受けることでできること、他者との協働によってできることなどをそれぞれ踏まえる必要があると考えられる。そして、これらの力を育むことは、聴覚に障害のある生徒の社会的自立や自己表現の充実に繋がると考える。

今後もさまざまな指導場面で、体験的な活動を取り入れ、生徒が現実に近い状況の中で想像力を

働かせながら学べる学習環境を設定することを意識したい。

〔謝辞〕

本稿の取り組みは、令和4年度筑波大学特別支援教育連携推進グループ現職教員研修生として本校で研修された澤田佳菜子氏（鳥取県立鳥取聾学校教諭）の多大なご協力によるものである。ここに感謝の意を表す。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て実施されたものである。

〔参考文献〕

- 澤田佳菜子（2023）聴覚障害のある生徒の障害認識. 令和4年度筑波大学特別支援教育連携推進グループ現職教員研修・研修成果報告書.
- 近藤誠司・中野充博（2021）コロナ禍における聴覚障害者の防災意識調査—滋賀県草津市におけるアンケートから—. 社会安全学研究第11巻, 109-123.
- 雁丸新一・橋本時浩（2016）聴覚障害生徒を対象とした東日本大震災から学ぶ授業の実践報告. 聴覚障害 766号, 54-59.
- 国立特殊教育総合研究所聴覚・言語障害教育研究部（2001）聴覚障害児の障害認識と社会参加に関する研究—「自立活動」の検討を中心に—.